

石井鶴三、2体の《島崎藤村先生木彫像》 ——新発見の木片史料による制作過程の検証——

福江 良純（北海道教育大学釧路校）

本研究は、近代日本を代表する彫刻家の一人である石井鶴三（1887 - 1973）が信州の木曾福島で制作した2体の《島崎藤村先生木彫像》のうち、第2作目の木片の発見に基づき、近代木彫に多大な影響を残した石井の造形論について考究するものである。

石井の手による島崎藤村像は、第30回日本美院展出品の《藤村先生像試作》（木彫第1作石膏原型、1943）に始まり、木彫《藤村先生（第1作）》（1950）、木彫第2作石膏原型（1950 - 1951頃）木彫《藤村先生（第2作）》（1951）の計4体を数える。第1作石膏原型は、藤村自身がモデルに坐した、その生前の面影を伝える唯一の像であり、それをもとに制作された木彫《藤村先生（第1作）》は、木彫における造形の論理を「木取り」という手法において示す実作品として重要である。そして、それらに続いて取り組まれた2作目の藤村像は、藤村から受けた感銘そのものに純化されているという点で第1作を主題的に一歩進めたものであり、主題と制作手法の関係を考察する上で貴重な手掛かりをもたらす作である。

当時、石井に師事していた笹村草家人（1909 - 1975）は、藤村像制作に際し「木彫に近代芸術の活路を確立せんとする特別な意味がある」と言い、木取りされた木片すべてに日付と部位を記して史料とした。これらの木片を中心とする藤村像関連史料は、藤村像制作事業の主体である木曾教育会によって付属施設に保管され、今も制作事業の顕彰が続けられている。ところが、これまでのところ、教育会における藤村像関連資料の総括と展示は2体の藤村像のうち第1作のみに留まっている。ここには、永らく第2作の木片の所在が定かでなく、第2作に関する研究が着手されてこなかったという事情が関係する。しかしながら、第2作は第1作において達成できなかったフォルムを主題的に回復した渾身の作品であったことは、造像の経緯に関する笹村の記録から明らかである。つまり、近代芸術における藤村像の制作意義は、2体を総合的に検証することで一層豊かな意味を現すものであり、今般、研究者が第2作のものと特定した木片群は、これまでの第2作関連史料との整合性はもちろん、第1作関連史料についても新たな光を照射するものである。

研究者は、第2作のものと推定される約120点の木片を、そこに書き付けられた文字情報とともに一覧表にまとめた。藤村像第2作は、第1作では成らなかった藤村の人格の描写を上半身の捻りのうち実現する意図をもって着手されたが、それら木片表面に残る下図の痕跡には、石井の主題追及に向けた厳密な検討が表れている。ここに、塑像と木彫を方法論として一つに統合する造形論を作品とともに示した、石井の近代芸術における功績が読み取れる。本研究は、この近代彫刻の方法論についての考察を以て、日本近代彫刻史における石井の評価の在り方を問うことを目的とする。